旧制高等学校ドイツ人講師の見た四国

依岡隆児

Shikoku, aus der Sicht eines deutschen Lehrers an einer Vorhochschule im früheren Schulsystem in Japan

Ryuji YORIOKA

Abstract

Hier wird behandelt, wie ein Lehrer an einer Vorhochschule im früheren Schulsystem Shikoku betrachtete. Gottlob Bohner, ein Bruder Hermann Bohners – einem ehemaligen Kriegsgefangenen im Lager Bando – arbeitete 1925-1928 als deutscher Lektor an der Vorhochschule Kochi und schrieb zwei Essays über Japan und Shikoku: „Ein Jahr in Japan“ (1930) und „Nach Ostasien im Zeichnen des Wiederaufstiegs“ (1931). Dies sind jetzt auch für uns Japaner sehr wichtige Dokumente, in denen vieles über die damalige Stadt Kochi und die Lebensweise ihrer Bewohner nachzulesen ist.

In diesem Aufsatz möchte ich über den Hintergrund und Inhalt dieser Essays nachdenken, vor allem die dort festgehaltenen Betrachtungen Shikokus.

はじめに

本論は、四国の旧制高等学校に赴任したドイツ人講師が大正から昭和にかけての四国の地方都市（高知）をどう見たかを、そのエッセイから読み解いていくものである。外からのまなざしを通してみると、見慣れた風景も違って見える。「内」にいる人が当たり前と思って見向きもしなかったものが興味深く観察されていたりもする。ここでは旧制高知高等学校に1925年から1928年まで外国人講師として赴任していたゴットロープ・ボーナーの二冊のエッセイを取り上げ、比較文化的視点からこうした「外からのまなざし」で四国を見ていきたい。[1]

ボーナーのエッセイは大正から昭和にかけての四国の地方（高知）をきわめて刻銘に記録している。土地の事物・風俗を詳細に客観的に記録しており、当時の町の様子を知るよい資料ともなっている。人びとの生活ぶりや風習の観察、異文化体験的エピソードを、ときにユーモアを交えて紹介していた。貴重な写真も付け、地方における外国人ネットワークの存在にも触れている。

しかし、これらのエッセイは、ドイツはもとより日本でもほとんど知られておらず、いまや埋もれてしまっている。ただ大和啓祐氏がエッセイでボーナー兄弟のことを紹介し[2]、井上純一氏がヘルマン、アルフレート、そしてゴットロープのボーナー三兄弟について論じ、ゴットロープのことも調査しているくらいだ。そのうち井上論文はゴットロープの二つのエッセイをたしかによく調べて紹介しているが、ボーナー兄弟の追究がテーマとされており、彼が見た四国がどうだったのかという観点で書かれていたわけでは、必ずしもない。[3]

---

[1]参考、星野勉編『外から見た「日本文化」』法政大学出版会、2008年。

[2] 大和啓祐「ふたりのボーナーさん」、『鶏肋大和啓祐教授退官記念集』、高知大学人文学部独文研究室編、1992年

[3] 井上純一「三人のボーネル兄弟の日本—牧師館の子 Hermann Bohner (2)—」、『「青山戦ドイツ兵俘虜収容所」研究』、青山ドイツ兵俘虜収容所研究会（鳴門市ドイツ館）、2009年7月。なお、両大戦間の日本におけるドイツ人の日常生活については、インタヴュー集『生きられた同時代　1923—1947年の日本におけるドイツ人の生活』があるが、ここにはG.ボーナーのことは言及されていない。参考：Franziska Ehmke und Peter Pantzer (Hg.): Gelebte

そこで、ここでは彼が当時の四国・高知がどういう風に見たのかを考察することを主たる目的とする。手順としては、まず旧制高等学校ドイツ人講師について概説し、次にゴットロープ・ボーナーについての略歴と来日の経緯を触れ、そして彼のエッセイから当時の高知を知るのにふさわしい箇所を翻訳し、それに注釈と解説を付けていくものである。

1．旧制高等学校とドイツ人講師

旧制高等学校は地元に根づき、生徒たちは大らかな風土の中で青春を謳歌していた。ドイツ語やドイツ文学を学ぶ者が多いせいで、奇妙なドイツかぶれ現象も起こっていた。当時の高等学校はどんなふうだったのだろうか。ロベルト・シンチンガーが、1923 年から 42 年まで勤務していた大阪高等学校での最初のクラスについて、こう述べている。

「きたない制服をして長髪の人目をひく学生たちは、ひげもそっていないで、わきに手ぬぐいをぶらさげ、はだしで巨大な下駄をはいていた。（中略）クラスが騒々しくなると、私は子守歌をうたわせた。そうすると静かにおとなくさせることができた」。[4]

当時の高等学校には蛮カラな気風があったことがわかる。しかし、シンチンガーは生徒とすぐに「良い友」となり、付き合いは今日まで続いているという。さらに、地方の高等学校に勤務した若いドイツ人講師の中には、こうした自由で飾り気のない生徒たちの中に飛び込んでいって人間関係を築いた者たちもいた。[5]

四国には旧制高等学校がいわゆる「ネームスクール」として、松山と高知にあった。そこでは英独仏語の第 1 外国語別に甲・乙・丙類に分けられていた。フランス語が置かれていたのはまれだったが、ドイツ語では地方でもネイティヴの教師が雇われていた。[6]旧制高知高等学校は文

Zeitgeschichte: Alltag von Deutschen in Japan 1923-1947. München 2000.

[4] Gedankenschrift für Robert Schinzinger. Tokyo 1990. S. 9. (1986 年の “Vita “より)

[5]参考、旧制松本高等学校に勤務したヘルベルト・ツァヘルトについては、ズザンナ・ツァヘルトほか『ズザンナさんの架けた橋～日本とドイツ　私の 87 年』（集英社、1996 年）に詳しい。

[6]上田浩二・荒井訓『戦時下日本のドイツ人たち』集英社、2003 年。戦時下において各地の旧制高校に赴任していたドイツ人教師のことが紹介されている。

科に甲類が一組と二組、乙類が一組。理科は甲類、乙類にそれぞれぞれ一組ずつあった。同窓生の談によると、文甲は年間、第一外国語の英語は270時間、第二外国語のドイツ語が90時間、文乙は第一外国語のドイツ語が330時間、第二外国語の英語が120時間で、文乙の方が語学の時間が多かった。週32〜3時間のうち語学が十数時間だったことになり、語学の授業がいかに重視されていたかがわかる。[7]

板東俘虜収容所にいたヘルマン・ボーナー[8]は第一次世界大戦後、関西の外国語学校（大学）で日本研究をしたが、その末弟アルフレート・ボーナー（Alfred Bohner, 1894-1958）は、1922年から28年まで松山高等学校と士官学校で教えた。むろん、兄ヘルマンの斡旋である。彼は四国遍路の研究を博士論文として書いている。1927年、自身も四国遍路に出ている。28年に帰国、フォアアルベルクに住んだ。

彼の遍路研究『同行二人巡礼　四国八十八カ所』(Alfred Bohner: Wallfahrt zu Zweien　Die 88 Heiligen Stätten von Shikoku. Tokyo (O.A.G.) 1931. 2011年にモートン氏によって再出版された）は、伊予史談のメンバーの支援を受け、書かれている。出版にはグンデルトとマイスナーが協力した。この著作は四国巡礼と民衆の生活との関連をテーマとしている。日本での空海や四国巡礼の先行研究もよく渉猟している。

同様に、彼は『古今知恵袋』の翻訳も手がけている(Alfred Bohner(übersetzt): Japanische Hausmittel. Das Buch „Kokon Chie Makura“. Tokyo 1927. [O.A.G. Band11 Teil E])。その「翻訳者の序」には、この本は二百四年前のもので、今日でもその「知」は息づいている。これは典型的な文化の鏡であると書かれている。また、これと同種の本『秘事思案袋』を高知で見つけたと述べている。軽井沢で1926年8月に執筆とあるので、夏休みに避暑で過ごしているときに完成させたものと思われる。

ただ、アルフレートは『日本と世界』(Alfred Bohner: Japan und die Welt. Langenfalza, Berlin, Leipzip 1938.)では、かなり軍国主義的論調を強めている。日本紹介の本であるが、彼は日本人の公共心や犠牲

高知のエーヴェルスマイアー（エーバースマイアー）のことも出ている。

[7] 『自由を空に〜旧制高知高等学校外史』南溟会・旧制高知高等学校同窓会、1982年、85〜86頁

[8] 参考、『ヘルマン・ボーネル先生生誕百年記念展展示会パンフレット』大阪外国語大学ドイツ語学科研究室、1984年

精神を称え、ドイツも見習うべきだとして、これはヒトラーの精神に通じるものでもあると述べている。

一方、高知の方はどうだったか。旧制高知高等学校のドイツ人講師は旧制高知高等学校同窓会『会員名簿』第24号（2002年）によると

「ブラッシュ、フリッツS.　大正13年4月～大正14年3月
ボーナー、ヤーコプG.　大正14年4月～昭和3年4月
ヴェーデル、マックス　昭和3年4月～昭和6年3月
コンラディー、アレキサンダー　昭和6年4月～昭和13年3月
ビンケンシュタイン、ロルフ　昭和13年9月～昭和14年1月
エーベルスマイアー、ベルント　昭和14年1月～昭和16年11月
クリストファース、ジークフルート　昭和16年11月～昭和20年5月」[9]

と、7名いた。このうち初代のフリッツ・ブラッシュには日本人の妻の間に息子クルトがいた。彼は後に禅画の研究で知られる。[10]もう一人の息子は高知に連れてきていて、城東中学校に通わせていた。[11]

太平洋戦争直前に在職していたベルント・エーバースマイアー（Bernd Eversmeyer, 1906-1998）は、ヴェストファーレン州ビーレフェルト生まれである。1939年から41年まで、DAAD（ドイツ学術交流会）派遣で、旧制高知高等学校ドイツ語講師となった。その後、41年から45年まで京都の独逸文化研究所事務局長を務め、47年にアメリカ軍がすべてのドイツ国民の本国送還を命じるまでここにいた。47年から57年まで帰国しドイツで過ごし、57年から65年まで再来日、東京独逸学園校長を務め、65年帰国し、71年からボッフム大東亜科学研究室で日本学を専攻する。87年、高知高校創立65周年記念祭で再来日している。

旧制高等学校講師時代の高知の印象については、1995年3月31日のボーフムでの聞き取りで、こう回想している。

---

[9] 旧制高知高等学校同窓会『会員名簿』第24号、2002年

[10] 参考、クルト・ブラッシュ『禅画と日本文化』木耳社、1975年

[11] 旧制高知高等学校50年史『高知、高知、あゝ我母校』旧制高知高等学校同窓会、1972年、468頁

「高知では私たちはたいへんうつくしい田園に住んでいました。隣はその学校のイギリス人講師でした。家の前には米とイグサを代わる代わる植える田圃がありました。イグサは11月から12月のはじめに植えられ、収穫後畳に加工されました。田圃の肥やしは私たちの家の汚物だめから取られていました。すべてが自然そのままだったということです。夏の夜には蛙の鳴き声がすごく、ほとんど眠れないほどでした。とても美しい時代でした。高知も都市化が進み、多くの田圃はコンクリートに席を譲ってしまいました」。[12]

彼の博士論文には後に、旧制高知高等学校の教え子だった細井宇八氏（徳島出身）による訳が出た（『危殆の士　ある同時代の人の判断と後世から見た菅原道真』、1991年）。これは、高等学校の生徒や市民たちが高知の潮江天満宮で合格祈願などの願かけをしているのを見て、民間における道真信仰に興味を持ったことがきっかけで書かれた。

『自由の空に　旧制高知高等学校学校外史』に、彼は「高知高校での出会い」という一文を寄せている。だがここではもっぱら同僚たちの思い出を語っていて、高知の土地のことはあまり出ていない。これは同窓会の記事という性格上いたしかたないことではあるが、後に述べるゴットロープ・ボーナーの記録とは大いに趣を異にしている。その同僚たちとの交流という点でも、淡い交わりという域を出なかったようである。

「同僚教授の諸氏が歴史の中をどう歩いて行こうとしているか、何はさて置き、この人々自身のもつ歴史について、私は何も知らなかったし、大部分の人とは、その後の三年間も互に黙って毎日お辞儀するか、昔習ったドイツ語を改めて思い出そうとする人々とは Guten Morgen. や Guten Tag, wie geht es Ihnen?の挨拶を交す程度の交わりを出なかった」。[13]

戦時体制に突き進む時代の空気ということもあったのかもしれない。ゴットロープ・ボーナーの大正から昭和にかけての時代とは随分異なっていたとしても、致し方ないだろう。

独逸文化研究所で、京都の独文学者・成瀬清（無極）らとも交友、

---

[12]荒井訓「終戦前滞日ドイツ人の体験（4）―『終戦前滞日ドイツ人メモワール聞取り調査』―」『文化論集』20号、2002年、212頁

[13]『自由の空に　旧制高知高等学校学校外史』、前掲書、337～338頁　（大和啓祐訳）

ナチスとは一線を隠していたという。ナチ親派のデュルクハイムの講演をいやいやながら認めたというエピソードも残っている。だが、教え子たちの証言では、旧制高等学校時代の彼は「ときどき『ハイル・ヒトラー！』なんてやっていましたよ」「昭和 14 年始めになって、ヒトラー・ユーゲントのちゃきちゃきというので」来たとされている。[14]

2．ゴットロープ・ボーナーについて

本論で扱うのは、旧制高知高等学校の二代目ドイツ語講師であるゴットロープ・ボーナー(Gottlob Bohner, 1888-1963)である。インフレのドイツ（ラインラント・ファルツのビルケンフェルト）から兄弟の誘いで 1925 年に日本にやってきた。同時期にアルフレートも 1922 年から、旧制松山高等学校に勤務していた。ゴットロープは 1925 年から 28 年まで高知高等学校で勤務している。妻とまだ小さな息子を連れていた。この息子のハインリッヒは後、1983 年に松山と高知を再訪したほど、高知での生活を懐かしんだ。

時代もよかった。高知高等学校教師だった岡本重雄は「高知高等学校の『古き良き時代』は、江部初代校長の人格が、第一回生の間に、なお強く作用していた昭和 1 年から昭和 3 年のあたりであった」[15]と述べている。まさしくボーナーがいた頃が「良き時代」だったことになる。ボーナーが去ってから、左翼の取り締まりが始まる。その点でもボーナーの高知滞在は恵まれていた。

父はハインリッヒで、アフリカのガーナやカメルーンで 35 年間、布教活動をした新教の宣教師だった。兄弟は五人いたが、一人は早くに亡くなった。長男がテオドアで、父の伝記を書いている（Der Schumacher Gottes. 1934）。次男が板東俘虜収容所にいたヘルマン、三男がゴット

---

[14] 同書、179 頁。 なお、エーバースマイアーが後に勤務した独逸文化研究所の雑誌『独逸文化研究会年報』1940 年～42 年（Berichte der Deutschkundlichen Arbeitsgemeinschaft im Deutschen Forschungsinstitut Kyoto）には、高知時代にすでにエーバースマイアーも投稿している。雑誌全体の目次の題名を見るかぎり、この団体が「リベラル」だったとは思えない。ファシズムに迎合している記事も見うけられる。エーバースマイアーについての自称・他称「リベラル」という形容も真に受けるわけにはいかないのかもしれない。

[15] 同書、96 頁

ロープ、四男がアルフレートだった。四人とも博士号を取得していた。

ゴットロープはJakobo Gottlob Bohner といい、同窓会の『会員名簿』では「ボーナー、ヤーコプ G」と記載されている。彼については従来、生没年と住んでいた場所が明らかにされ、同窓会誌に教え子たちの証言がいくつか残っているくらいだった。それによると、ボーナーは第一次世界大戦のとき将校だった。高知に赴任したときすでに38歳だったことになる。生徒たちからは「好々爺」と親しまれ、ドイツ語の歌を歌ってくれた。また寮歌にドイツ語訳を付けてくれた。親日家で、帰国後は教育行政に従事し、高官となったという。[16]だがこのたびドイツ国立図書館の検索で、さらに以下のことを明らかにすることができた。1988年1月23日にマンハイムに生まれている。シュパイアーで育ち、ギムナジウムを出ている。その後、大学はエアランゲン、ミュンヘン、ベルリンと転々とし、1909年にハイデルベルクで学位を取っている。博士論文を元にした著書に Das Beiwort des Menschen und der Individualismus in Wolframs Parzival.(Heidelberg 1909 : Rössler & Herbert)がある。[17] 彼は中世ドイツ文学（パルツィファル）を主たる専門としていたのである。

ボーナーは日本紀行と滞在記を二冊出している。『東アジアへ』(Gottlob Bohner: Nach Ostasien im Zeichnen des Wiederaufstiegs. Birkfeld=Rahe 1931. 101p. Of plates; 22cm.写真 16 枚。以下、NOと略)と『日本の一年』(Gottlob Bohner: Ein Jahr in Japan. Köln 1942 (1930).79p.; 18cm.[Schaffsteins Grüne Bänkchen; 100]. 写真5枚、地図1頁。以下、EJと略)である。2冊ともドイツ文字で書かれている。

『東アジアへ』の方は、副題に「復興の兆しのもとで」とあり、筆者については「日本でドイツ語講師を務めたゴットロープ・ボーナー博士」としている。印刷所はHugo Enke (Birkenfeld=Rahe)で、彼の地元である。ドイツの国立図書館にも所蔵されていないことから、自費出版だったのではないか。それゆえ、プライベートな写真も載せることができたのかもしれない。ドイツから日本に向う船旅の記録が大半を占めていて、

---

[16]旧制高知高等学校50年史『高知、高知、あゝ我母校』、前掲書、468、474頁

[17] バイエルン国立図書館(BSB)における「Gottlob Bohner」のファイルによる。

日本に着いてからのことは最後の方のみとなっている。ヨーロッパ、アフリカ、中央アジア、インド、東南アジアと、寄港した土地についての印象を刻銘に書いている。異国・異文化へのまなざしには偏見はあまり感じられず、むしろ下層の人々の生活に関心を寄せている。神戸で上陸、芦屋にいた兄ヘルマンを訪問、その後弟アルフレートに伴われて松山に渡り、バスで四国山脈を越えて高知入りするまでを書いている。写真や絵葉書も載せられている。高知高等学校での記念写真や授業風景もあり、貴重である。

その中の 1 枚はボーナーの高等学校での授業風景を写したものである。キャプションに、映画「アルト・ハイデルベルク」の解説をしているところと、出ている。なるほど写真では黒板には「Alt-Heidelberg」の文字が見え、写真入り冊子が立てかけられている。彼の母校の「ハイデルベルク」大学を舞台にしていた戯曲が原作である。この映画（ドイツ映画、ウーファ社、1923 年）は「思い出」という題で高知高等学校開校式（1925 年 11 月 3 日）を記念して堀詰座で上映されたものでもあった。[18]この年の 4 月にボーナーは赴任しているので、この映画の上映には彼の意向も働いていたのかもしれない。『アルト・ハイデルベルク』は戦前の高等学校・大学で愛された作品で、後に高知高等学校の生徒たちによっても上演の計画がなされた。いつしか高知高等学校生たちにとっては、高知が「懐かしのハイデルベルク」となっていたのである。ちなみに、ボーナーの本の写真に写っている生徒たちはほぼ全員短髪・スポーツ刈りで、シンチンガーが大阪で教えた生徒たちが長髪だったのとは異なる。着物姿の者もいる。

『日本の一年』の方は、目次の中にある本の紹介では「ゴットロープ・ボーナーの『日本の一年』は著者とその家族の生活の一年にわたるスケッチである。この時期につけられていた日記に忠実に書かれており、このシリーズでは実際に体験したことのみが収められている」（EJ, S.5）とある。なお初版は 1930 年で、42 年の再版は「野戦郵便版 Feldpostausgabe」でハガキ大サイズであり、ケルンの出版社で、児童向けの本を多く出している「ヘルマン・シャフシュタイン」社から出ている。「緑の巻」のシリーズに入れられているが、ここには日本の昔話も入っていた。このシリーズの『浦島太郎』と『桃太郎』については、

[18]『自由の空に　旧制高知高等学校学校外史』、前掲書、81 頁

ゴットロープも言及している。

3．『東アジアへ』『日本の一年』より（翻訳と解説）

ゴットロープ・ボーナーはこの二つのエッセイで、昭和の初期の四国、特に高知について、旧制高等学校の一外国人講師として生き生きと記録している。ここでは彼の紀行文と日本滞在記から、当時の四国の様子を具体的に「外からのまなざし」で見てみよう。

3－1　『東アジアへ』

このゴットロープの出した『東アジアへ』は、ドイツを船で出発してこの高知に赴任するまでの旅行記である。日本到着後は、神戸で兄ヘルマンの家に立ち寄り、1925 年 4 月に四国に入った。神戸から高松ではなく愛媛より四国に入ったのは、もちろん当時弟のアルフレートが松山にいたからである。まず弟アルフレートのいる松山（道後の近く）に立ち寄っている。四国については、二百年前に初めてきたドイツ人（：ケンペル）が日本を世界に模していたが、それによれば四国はオーストラリアにあたると述べている。(NO, S. 74)

松山に近い高浜で四国に上陸したときには、土地の人々に珍しがられた。神戸ではなかったことだ。いよいよ田舎にきたんだと思う。(NO, S. 87) 列車ではたまたまドイツ語を話す医者と乗り合わせ、難しい本は読むが話す方はだめだと知り、これから始まるドイツ語教育のことを想像したりする。（NO, S. 89）高知へは義妹とその娘がついてきてくれる。国鉄の乗り合いバスを乗り継いで、四国山脈を越えていくしかなかった。

高等学校については、こう述べられている。

「学校からは出迎えは誰も来ていなかった。おそらく、私たちは車でやってくるものと思われていたのだろう。しかし、その時の車夫たちも、ここではあまり愛想良くなかった。その後、家に送ってくれたときにはそうでもなかったが。停まると、たちまち珍しい客人を見ようとひとだかりができた。偶然、ドイツ語ができる少し年長の若者が、通りがかった。帽子と制服で、彼が高等学校生徒だということがわかった。（私は後に彼を授業で教えたが、その私の受け持ちのクラスでは一番よくできた。）彼は学校がどこにあるかを説明してくれた。そこは歩いてものの 10 分もかからなかった。そこで、私たちは女性たちや子どもたち、荷

物のために三台の人力車を雇い、私自身はその生徒に案内してもらい、歩いて行った。お城の公園を通ると、せいようつつじが咲き始めていた。お城と城山は松山のよりは小さかったが、その分、なにもかもが美しく、驚かされた。私たちは後にもっと有名な公園を見たが、こんな手入れの行き届いているのに同時にあふれんばかりの印象を与えるものにお目にかかったことはない」。(NO, S. 97 f.)

高知の第一印象はあまりよくなかったようだ。外人が来たというので、人だかりができたりした。しかし、さっそくドイツ語のできる高等学校生徒が現れ、案内してくれた。駅から歩いてお城の近くの高等学校に向うゴットロープは、その公園の美しさに心奪われる。

高等学校は現在の高知大学附属中学校・小学校の敷地にあった。外国人の宿舎はその北東の端で、現在は附属中学校のプールがあるあたりだった。[19]バティ・スミスという独身のイギリス人講師がすでに赴任してきていた。

「学校はまだ二年前にできたばかりで、たくさんの校舎があった。大きな記念会館と広々とした二階建ての校舎があって、そこには講義室と幾つか実験室、閲覧室、図書室、体育館、食堂、学生宿舎があり、屋根の付いた渡り廊下で結ばれていた。ほとんどすべてヨーロッパ風に建てられていて、チャコールグレーのペンキを塗った板張りが施されていた。学生宿舎だけが、離れに建てられた何軒かの日本人教師用の住まいと同様、和風で、ペンキも塗られていなかった。図書館は地震や火事を恐れて、しっかりしたセメントでできている。すべてが新しく、洒落ていた。校舎や運動場の周りにも、木が植えられていた。たいていは松や桜だ。なんと美しいことか！一本の道がこのキャンパスの中央入口側に沿って延び、狭くはあるが舗装された車道が—もちろん左右には側溝があった—別の側を回っていった。全体的に見ると、ちょっとした大学といった風情だった。日本にはまだなんとかいくつかの大学があるだけ（少なくともこの語のドイツ的意味においては）なので、高等学校、すなわちVorhochschulen はそのぶん価値があった。その三年間のコースはだいたい我々の大学の第一学年に相当している。高等学校に入ることは学生

---

[19] 同窓会誌にその略図がある。『自由の空に　旧制高知高等学校学校外史』、前掲書、326 頁。旧制高知高等学校 50 年史『高知、高知、あゝ我母校』、前掲書、20 頁

の卵たちにとっては自由な生活の始まりだったし、日本の都市はこうした学芸の殿堂を有することをおそらく誇りに思っていたことだろう。ちょうどドイツの都市が自分ところの大学を誇りに思っているように」。(NO, S. 100 f.)

高等学校の建物や敷地について詳しく述べている。当時の校舎の様子がよくわかる。現存する白黒写真ではわからないペンキの色まで記している。宿舎の家は城山公園の近くの一階屋で、気に入る。学校は二年前(1923 年)にできたばかりで、すべてが真新しい。高知には欧米人はイギリス人の同僚とアメリカ人の牧師たちがいるだけである。欧米人の子供はボーナー家の息子と牧師一家の子供だけだった。地方都市で高等学校を持つということは当時、町の人々には誇りだった。そして、ドイツの町が大学を持つことを誇りにしているのと同様だとする。

当時、彼は日本語ができなかったが、やがて日本語をある程度身につけたようである。そのため、ここでも日本語に対する関心の高さがうかがえる。たとえば、「高知」は「高い知」であるなど、いちいち地名をドイツ語に訳している。また高知という土地については、「この土地はちなみに古い文化の国なのだ。ここでかなで書かれた最初の本、『土佐日記』が生まれた。そしてこの辺地にある田舎から近代日本のために一連の優れた政治家が輩出されたのである」と述べ(NO, S. 101)、地元の文化・歴史に対しても関心を寄せている。ちなみに、桂浜の坂本龍馬像が「有志」によって建立されたのは、ボーナー赴任時のことだった。この「有志」の中心メンバーが高知高等学校生たちだったのである。

高知については、遍路に対して冷たいなどと述べている。特に弟のアルフレートは八十八カ所を実際に回り、論文も書いていて、高知についてはかなり辛口だったことも影響していたかもしれない。

「高知の港は市街電車で町と結ばれていて、うっそうとした山々に取り囲まれた湾の真ん中にあった。この湾には『鏡の川』〔鏡川〕といくつかのちっぽけな川が流れて込んでいる。この湾は入り口が狭いのでマンモス汽船はほとんど通れないが、風景としては、私たちはこれほど美しい湾を見たことがない。義姉が乗ったのと同じ船に偶然、大阪での競技に参加する高等学校生の一団が乗り合わせた。仲間たちの一群が漕手たちのお供をしてボートを漕ぎ、例によって別れのときには陸から色とりどりの紙テープを投げていた。そして、がっしりとした若い男たちが校歌を高らかに響かせていた」。(NO, S. 102)

湾の美しさを絶賛している。また偶然、義妹たちの乗る船に大阪に遠征にいくボート部の生徒たちが乗り合わせ、盛大な見送りをしていた。当時、湾内でボートが漕げたことがわかる。ちなみに、ボート部は1925年5月の関西漕艇協会主催のレースで初出場し、初優勝を果たしている。[20]その見送りを、ボーナーたちは目撃したのだろう。

３－２　『日本の一年』

もう一つのエッセイ『日本の一年』は、高知での生活をあと一年残すだけとなったところから、日記形式で書いた好エッセイである。

「昭和2年、1927年3月21日、高知。二年前には私たちはまだ大旅行中でインドを回っていた一年が改まると、私たちは多分ふたたび帰郷の途についているだろう、おそらくシベリアかどこかを通って。そしてふたたび家に落ち着いた頃には、これは単なる夢だったんだと思えることになるかもしれない。記憶は灰色の毎日を過ごすうちに色あせ、ちょうどギリシア人が言う、いけにえの新鮮な血を飲むことなしにはもはや語ることのできない冥界の影といった類のものになるだろう。そういうわけで、消え去りつつあるものをいくばくかでも書きとめて、確かなものにしておくことにしよう。そうすれば私たちが今いるこの祝福された島がふたたび遥かかなたに沈んで消えたとしても、血を飲むなどということ以上に現実の役にも立とうというものだ」。（EJ, S. 6）

と、まずこの本の趣旨が述べられている。レトリック豊かで、ギリシアの話（オデュッセウスの「冥界下り」に出てくるいけにえの血を飲む預言者の話）を引き合いに出すなど、文学が専門だけあって蘊蓄がある。

この本では高知での日常生活のことを記しているが、四季の移り変わりもとらえている。春の行楽、夏には富士の近くの御殿場で避暑、またその帰途、兄ヘルマンの所へ立ち寄っている。今は神戸から大阪の住吉に住んでいるが、兄は生憎留守だった。（EJ, S. 64）秋の室戸への遠出なども印象深く語られている。当時の高知の様子も細かく描かれていて、貴重な記録ともなっている。

春の記述から見てみよう。

「春の始まり！そう、ここ四国では、春の暖かさが実際に3月21日

[20]旧制高知高等学校50年史『高知、高知、あゝ我母校』、前掲書、129頁

までにやってくるかどうかなどと思い患う必要はない。たしかに私たちは冬の月日の間にはたっぷり寒気やこがらしを味わった。2月には山間部は言うまでもなく、海岸の平地までも雪が舞った。しかし3月21日でそれも終わりだ！私たちの住まいのあるすぐ近くのお城の公園は、すでに数週間前からすばらしい梅の香りで満たされていた。屋根が優雅に反って瓦を互いにかみ合わせている、美しく保たれた天守閣が、花の海の中に浮かんでいた。雪のように白かったり、緑がかった白だったり、赤やバラ色で満たされていたり、満たされていなかったりだったが、そうしたすべてのものの上には、いつも青い空が輝いていた。

『春はお祭りだ』とウーラントは言った。ここではこのお祭りが実際に祝われている」。（EJ, S. 6）

まさに「春はお祭り」という高知の春が記録されている。春はドイツよりはるかに早く、着実にやってきた。お城は現在のすべり山あたりか、梅の花が見ごろだった。庶民たちが春を楽しむ様を、ドイツのロマン派の詩人ウーラントを引き合いに出して表現している。

種崎への遠出はとりわけ印象深く述べられている。梅の花見客でにぎわう町中を避けて、海浜の種崎に出かけている。海水浴場で知られているが、春には春で行楽客がやってきたことがわかる。浦戸湾の巡航船が高知から出て、人々は遠出できたのである。

船着き場へは、「お城の公園を抜けて市街電車に乗り、かなり広くて、延々と続くメインストリートを通って行った」。（EJ, S. 6）徐々に町らしくなっていて、西洋風の建物も目に着いた。「私たちがここに住むようになってから、通りにはすでにコンクリートでできた都会的な建物が増えてきた。私たちがやってくる直前に建てられた駅と港をつなぐ横道は最近できて、お店があちこちに出没するようになっていた」。（EJ, S. 7）なかでも、アルファベットで「アポテカー」というドイツ語の看板を出している薬局に目がとまる。『高知市街図』によると、堺町の電車通りには原薬局があったので、おそらくここだろう。[21]このドイツ語「アポテカー」に彼はドイツに対する市民の畏敬の念を感じている。

「私たちはさらに進んで運河の近くの停留所にまで行った。そこから歩いて、短い純日本風の小路を抜けていった。道幅は2メートルで、魚屋やせんべいを焼く店やその他の店が左右に並んでいた。そして子ども

[21] 商工社調査部『高知市街図』大正15年（1926年）

や猫、哀れに足を引きずる犬がいた。やっと私たちは運河に到着した。海岸通りはありとあらゆる荷馬車でにぎわっていた。そこは『農人町』というところだ。すなわち『農民たちの通り』。しかしその名前は昔のもの。今日ではそこには農民は一人もいなかった。建物には商品を積みあげていたが、それらは艀で運河をとおって運ばれるか、ここで貯蔵されていた」。（EJ, S. 6）

土佐電鉄は当時、大きく南に迂回し、大川（「運河」）沿いの海岸まできていた。このあたりは倉庫群があり、荷揚げをしていた。にぎわっていたのはそのためか。ここの大川沿いに浦戸湾巡航船の発着所があった。大川、鏡川、浦戸湾が交わる所で、江戸時代には関所があったところである。この先は、当時は湿地帯だった。宮尾登美子『陽輝楼』で有名な得月楼本店もこのあたりだった。

「私たちは小型発動機船の船着き場に急いだ。そこから定期的に湾のあちこちに行く便が出ていたのだ。一艘の船がちょうど太平洋方面に向かうところだった。私たちは急いだ。というのも、待合室のベンチでは素敵な時間を過ごせそうになかったからだ。すばやく外から上甲板へよじ登り、自分たちの場所を確保した。そこからは航行中全方向を見渡せた。二つの船室があったが、ひとつは床と狭いベンチ（西洋風に座ることができる）の部屋で、もうひとつは畳の間（昔の日本風に座ることができる）だったが、二つとも満室だった。今日は人出が多かったのだ。すでにたくさんの団体が繰り出しているにちがいない。特別船の一群が空で戻ってきていた。

店の幟と他の小さな乗り物でごった返している狭い運河を通って、私たちの小型発動機船はゆっくりと湾の中へ進んで行った。すぐに港の右側に汽船が停泊しているのが見えた。それらの中で最大のものは休暇中に私たちをすでになんども大阪に運んでくれたものだった。左側には野鴨の群れが浅い箇所でパシャパシャやっていたが、そこには餌となる小動物に不足はなかったからだ。ありとあらゆる乗り物と出会った。巡航船は東アジア特有の大きな櫓だけでたいてい舵をとり、ドイツの水先案内人の言い方では wriggeln、すなわち、掻くような動きをして船を前に進めていた。大きな船はたいがいエンジンを持っていて、しばしば漁船の一群を後にしていった」。（EJ, S. 6 f.）

『高知海運のあゆみ　高知中央海運組合一二十周年記念誌』には、「昭

和 10 年頃　農人町堀川付近」の写真がある。[22]浦戸湾の巡航船については、明治 39 年（1906 年）に会社が設立され、小型発動機船で農人町―稲生―種崎間を巡行し始めたのが 1908 年だった。二つの会社が競争していたが、内海巡航株式会社が港内巡航株式会社を吸収合併した。大正末期には大型船 20 隻保有、一日平均 1500 人を輸送していた、とある。巡航船の写真も掲載されている。

「すぐに私たちは青い波の海にお目にかかれた。四歳になる息子のハイナーちゃんが飛び上がって喜んだ。濡れた砂でお城を作り、水路を付け、そこに砕ける波が入ってくるようにしていた。それから私たちは日光浴をした。暖流のおかげで、晴れた日にはどの季節でも、ここでは泳ぐことができる。もっとも大抵の日本人は夏の盛りになるまではそうしないのだが。泳いだ後、私たちは浜に沿って砂州の端まで行った。種崎という所だ。つまり『種の先』という意味。そこの海の家のところにはたくさんの松の古木が立っていた。この『千松（せんまつ）』〔公園〕と美しい浜は今日は、祝日のときと同様、遠足の客を引き寄せていた。学童もたくさんいて、笑い、歌い、遊んでいた。カクレンボ（年長の女の子たち）なんかをやっていた。その間に日本人がよくするように平たいアルミの容器に入れて持ってきたり、あるいは途中で薄板でできた木箱に入ったものを買ったりしてご飯と一緒に食べていた。レモネードやビール、お酒、フルーツ、砂糖菓子、鯛焼き Fischkuchen、ワッフル、（粗悪な）アイスクリームが間に合わせに組み立てた屋台やあちこちに出ているお店で手に入った。ハイナーちゃんのお目当ては遊び場だ。ブランコや平均台はいっぱいだったので、彼は今日は滑り台を何度かやることに甘んじるしかなかった。

海はありとあらゆるタイプの漁船でにぎわっていた。町からやってきた人々のなかには気晴らしのために釣りをする人もいる。私たちは 3 時に小型発動機船の停泊地を後にして松林とそれに隣接する村・種崎を通って湾に行くと、海で春の気分を味わおうとする遅れてやってきた人々に出くわした。いつもよりも多くの発動機船が動いていたので、待つ必要はなかった。私たちは若い娘たちの一群をお供にすることとなった。彼女たちは周りを持ち前の楽しい気分に感染させていった。湾の深

---

[22]高知中央海運組合二十周年記念誌編集委員会『高知海運のあゆみ　高知中央海運組合―二十周年記念誌』高知中央海運組合、1983 年

いグリーン色をした水上には、日の光が輝き、気持ちのいい風が吹き始めて、無数の帆船が蝶々のように滑っていった。屋形船（レジャー用の屋根付きの艀）からは陽気な笑い声と歌声が聞こえてきた。みな心に春を抱いて、幸せになって家に帰っていった」。(EJ, S. 10 f.)

「千松」公園は、種崎の浜にある松林の名所で、この中に潮湯温泉施設があった。ボーナーたちも利用している。昭和初期の『高知線交通便覧』によると、千松公園は「駅より農人町巡航船乗り場迄約七町（中略）巡航船にて約三十分にて種崎に達す（中略）種崎より公園迄四丁」「夏季海水浴客雲集し盛況を呈す。松林中に千松館潮湯ありて浴客の便を計る。設備完整せり、尚此地民家多く桃樹を植ゆ其数千本に近し。陽春三月開花期には遊覧客多し」[23]と紹介されていて、三月は桃の見ごろで、にぎわったとされる。当時は、夏の海水浴だけでなく、ここは春の行楽地でもあり、学童の遠足先でもあったことがわかる。種崎には屋台が出ていた。Fischkuchen というのは「鯛焼き」のことか。「ハイナーちゃん」とは当時四歳だった息子のハインリッヒのことである。「帆船」とは浦戸湾名物だった「帆傘舟」のことか。屋形船というのは、得月楼には上方からも客が来たため、お客のために昔ながらの屋形船を走らせていたものを指しているのではないだろうか。

このボーナーのエッセイは日記をもとに書かれているので、日常生活のこまごましたことが外国人の眼を通して語られているところが、また魅力である。食事について見てみよう。

「その頃は夕方になると私たちはよく日本人の同僚・荘さんのところに食事に呼ばれた」。（EJ, S. 13）

「ショウ」という同僚は、「荘直一」のことで、ドイツ語を教えていた。1924 年 8 月から 27 年 8 月まで赴任していた。生徒には人気があり、語学教育の実力者という定評があった。ゴットロープによると、彼はチンタオ戦争前に二年間、ドイツに留学していたが、その後チンタオで通訳をしていたとある。高知の後には水戸高等学校で教授になっている。ドイツ語参考書を多く出している。『趣味の和文独逸』（郁文堂、1929 年）、『独文和訳受験百題』（芸文書院、1937 年）、『自修独逸文法註解』、（Zusammengesetzt von N, Sho）Das Leben deutscher Jugend

[23] 吾桑駅長　武田富士麿『高知線交通便覧』富士越書店、73 頁

(Nanzando, 1941) などがある。続いて、荘家でのもてなしが詳しく語られる。日本の家の一般的な食事様式の一例のつもりで書いたのだろう。

「すると、ちょっとした訪問の際にはよくあるように、まず日本茶が出された。この緑色の苦い飲み物は砂糖なしで(取っ手のない小さなコップで)飲まれる。日本語で『お茶』と呼ばれ、黒い葉っぱを煮出す物をさす『紅茶』とは異なる。紅茶の方は、日本人はコーヒーと同様、我々以上にたっぷりと砂糖を入れて飲む習慣がある(そして取っ手のあるコップで飲む)。様々な色があるのは、お茶の木から摘んだ葉の色々な処理の仕方による。緑茶には色とともに紅茶では抜け落ちてしまう成分のビタミン C が残っている。私たちはリフレッシュさせてくれるこの飲み物の苦い味にとっくに慣れてしまっていたので、それが供されてうれしかった。それに対して、強いアルコールの米酒はできるだけ遠慮した。この『酒』と呼ばれるアルコールは普通は、温めて飲まれる。それもちっちゃな陶器の容器から注がれる。シュナップスに似た味がした。

お茶を飲むと、それぞれのお客の前にはお盆が置かれる。そこには小さな皿に色々な料理が載せられている。食器として約 20 センチの日本の箸が添えられている。それを右手の三本の指ではさみ、それをペンチのようにして食べ物をつかむのだ。ナイフは必要なかった、というのもどの食べ物もすでにあらかじめ十分細分されているからだ。左手で椀を持ち、好みに応じてその都度、口に運ぶ。たとえば煮出し汁を飲むときなどがそうだ。目の前にあるものはどれも、決まった順番などなく、お好み次第で食べればよかった。

出されたのは、おいしい魚のスープとさまざまなサラダ、蒸した豆(これは箸で器用につかまなくてはならない)、生の鯛の刺身(『鯛』は日本で最高の魚だ)、煮たウナギとご飯だった。食事の途中でさらに特別なものが出された。それぞれに茸や鳥肉、魚、小さな蟹、インゲン豆、ホウレンソウを卵のソースをかけ、一緒に蒸したものが小皿に入れて出てきたのだ。これは茶碗蒸しといい、とてもおいしかった。

塩の代わりにそれぞれのお盆には『ショウユ』と呼ばれる褐色のソースの入った小皿があった。(中略)

ちなみに、日本料理にはさらに別の付けたしがある。いわゆる『ツケモノ』だ。すなわち、『漬けたもの』。柔らかな大根や他の野菜と幾つかの果実はまず少し乾かしておいて、それから塩と糠、ときには酒に漬ける。それから適当な大きさに切るが、煮たりはせずに食卓に出す。日

本人の栄養にとって、これはとても意味がある。というのも、柔らかく炊いた米では歯を十分動かすことがなく、またビタミンも少ないが、漬けものにはこれが豊富だからだ。私たち自身はすでにこの健康的な食べ物に慣れていたので、欠かせないものとなっていた。西洋人のなかにはそれを『腐った大根』とからかう人もいるが、日本人ならヨーロッパの『腐ったキュウリ』のことを持ち出すかもしれない。

生の魚のことをとやかく言うことはない。西洋にだって、生のビーフステーキや生ハムがあるし、そればかりか生きたまま飲み込む牡蠣は言うに及ばずだ。ところが、日本人ときたらこっちの方は煮て食べるのが普通だ。刺身はショウユに浸すとまことに柔らかで生ハムのような味がし、とても食べやすい。それゆえこの料理は、そもそも上等の魚でしかしないのが普通なのだが、日本人にはとりわけ好まれているのだ。こうして私たちは以前にもしばしばそうであったように、この夕べも心ゆくまで堪能したのだった」。（EJ, S. 13~16）

食べ物・飲み物については、欧米との比較をしながら述べていて、比較文化的である。お茶と紅茶、酒とシュナップス、ショウユと塩…。なかでも「西洋人のなかにはそれを『腐った大根』とからかう人がいるが、日本人ならヨーロッパの『腐ったキュウリ』のことを持ち出すかもしれない」というツケモノと酢漬けキュウリとの比較からは、ボーナーのバランスのとれた異文化対応力がうかがえる。お茶には慣れているが、日本酒は苦手だった。茶碗蒸しはたいへん気に入っている。刺身を生で食べることに関してはさして気にしていない。西洋の「生ハム」を引き合いに出している。牡蠣については、逆にヨーロッパでは生で食べるのに、日本では煮ると述べている。

3 月 29 日に、「西村」という高校の卒業生が訪ねてきたことが触れられている。（EJ, S. 16）高知高等学校第 1 回生（大正 15 年 3 月卒業）で文科乙類の 32 名の内の一人の「西村正志」である。陸上部と弓道部に所属。本籍は兵庫で、龍野中学卒。東大経済を出ている。昭和 32 年逝去。高等学校では陸上部と弓道部に入っていた。ボーナーのところに春休みに訪ねてきたというのは、この当時東大に行っていたからで、彼は故郷の兵庫ではなく高知に「帰省」していたのである。[24]

[24] 井上論文でもこの「西村」という青年のことが出ている、「後日談がある。

桜についてはこう述べている

「花を付ける木の中で王様は、ドイツでもときおり観賞用の庭で見かける桜である。日本では山に野生し、シンプルな白い花をつける。しかし、それはまた赤色や、それどころか黄金色になって、満開であったりなかったりだが、公園や寺社の境内でも必ず咲いていた。実の方はごく小さなもので、かなり苦いが、花は満開のときには大陸のものを凌いでいた。（中略）しかしそれと較べて花は魂のためにあるものなのだ。そしてこの国のあらゆる美しい場所が桜の花の匂いの立ちこめた雲に覆われると、全国民はお祭気分になるのだった」。（EJ, S, 17 f.）

桜は花の中の「王様」であり、「魂のためにあるもの」なのだとして、桜の文化的・象徴的意味をとらえ、国民的な花であると紹介している。

寺社についても大きなスペースを割いている。八十八カ所札所が近くにあったこと、神仏習合のこと、そしてキリスト教教会との付き合いが記録されている。春先の風物詩としての遍路のことにも触れている。

「今がハイキングには一番いい季節だ。寒さはやっと過ぎ、他方夏の熱帯風の暑さや湿気はまだこれから。暑いといってもよい日があったかと思うと、また気持のいい涼しい日がそれに続く。仏教の巡礼者たちが白装束で、イグサか竹でできた傘のような帽子を載せ、数珠を首に巻き、長い杖を手にして、この地を寺から寺へ回っている。しばしば彼らは家の戸の前で鐘を鳴らすか、貝を吹くかして歌うようにお経をあげながら、巡礼のためのお布施を乞うのだった。四国の島にある無数の寺のうち、88 の寺が千年以上も前に生きた弘法大師とゆかりがあるというので、とりわけ大切にされていた。巡礼者は通常の誓願では、山や谷に苦労しながら、これらすべての寺を巡ることになっている。私たちの官舎から三分のところに、いくつかの田んぼの向う側にそのようなお寺がある。『心地よく幸運な寺』（『安楽寺』）で、第三十番札所である。神社、すなわち仏教伝来以前の単純な木製のお堂の在所がその寺とペアのように隣り合っていた。というのも、世界宗教として中国から日本へ伝わった仏教は長く支配してきたにもかかわらず、古くからの民間信仰とそ

ゴットロープを東京で案内した西村正志は、戦後の 1956 年 9 月に故郷ビルケンフェルトにゴットロープを訪ね、29 年ぶりの再会をはたしている」

の記念の社をともに存続させてきたからである。そしてあの弘法大師からして二つの宗教を結び合わせていたのだ」。（EJ, S. 18 f.）

寺と神社との関係に興味をひかれている。仏教と土着の信仰の併存は、神仏習合という文化現象としてとらえている。兄ヘルマンが弘法大師について論文を書いているので、詳細は彼に聞いたのかもしれない。[25]

「一年中、この神仏二重の聖地にやってくる信者はひきもきらず、夜ともなると木のてっぺんから電気の光があたり一帯を照らしていた。しかし、今はもちろん一番にぎやかなときで、とてもたくさんの巡礼者がやってきた。講堂はいつもは締められているが、彼らのために今は夜通し開けられている。竈を使わせてもらい、そこで彼らは米を炊いている（とはいえ近くの宿に行く者もいるのだが）。花の匂いは線香の強い匂いと混ざり合っていた。線香は束にして供えられ、檀に置かれた大きな灰受けに挿される。信者たちは聖堂の内部の前に膝まづく。そこは神聖なるものの在所とされ、彼らは立ち入れない。祈りを捧げる前にそこに掛っている鈴を引っ張り、手を叩く。これは家にいる人に自分の存在を知らせるために日本人がよくやる行為でもある」。（EJ, S. 19）

安楽寺はゴットロープの住んでいた宿舎から数分で行くことができた。薫的神社と同じ敷地で、まさに神仏混合だった。由来は、長宗我部の菩提寺・瑞應寺で住職だった薫的和尚が江戸時代、藩主・山内家のやり方に不平を唱え、獄死したことである。明治には廃仏毀釈で瑞應寺も廃寺となったが、薫的信仰は残り、神社として祀られたのである。ゴットロープの解説からは、彼がこの寺と神社の由来についてそれなりの知識があったことがわかる。また当時、ここでは夜の間、木に電気を懸けて照らし、巡礼者のために講堂を開放していたことがわかる。

宣教師たちの存在は、高知のように欧米人のほとんどいない土地では、やはり心強い存在だった。

「ここにはアングロサクソンの宣教師たちも何人かいた。私たちは彼らと付き合いがある。というのも彼らは私たちとイギリス人の同僚であるスミスさんを除けば、同じように生活していて、それゆえ私たちのここでの閉ざされた環境で必要なものを完全に理解してくれる唯一の人たちだからである。彼らは出会った最初から私たちに協力的で、家族の

---

[25] Hermann Bohner: Kobo Daishi. In: Monumenta Nipponica. Nr. 6 (1, 2)　1943.

一員のように親身になってくれた。彼らのうちの一人、エリスさんがこの4月12日に70歳で亡くなった。

彼は近くの教会に埋葬された。棺桶は純日本風だった。死者を敬うために、木は並はずれて強度のあるものを使った。単純だがきれいにカンナをかけた木で棺桶はできていて、厚さが10センチあった。蓋は巨大な一枚板で、X型の枘で横板につけられた。エリスさんは大男だったので、遺体を収めた棺桶は、聞いたところでは、約10ツェントナー〔1ツェントナー＝50kg〕あったという。盛大な（日本語でいう）告別式ののち、棺桶は白幕で覆われたトラックで運ばれた。参列者たちは別の車に乗ってそれに従った。墓地はここでは通常、山の斜面にあった。郊外ではどこでも村落近くの山は墓でいっぱいである。通常は一族の死者たちが長い年月、隣り合って葬られている。遺族たちは先祖を敬い、墓参りに来て、新しい花を供え、米を撒いていく。墓地は森の奥深くにあることもあれば、静かな高台から生業にいそしむ下界を見渡していることもある。

エリスさんの墓からは高知の山にかこまれた平野や湾をみごとに遠望できた。日本人の基準をはるかに上回る体格の彼のためには、二倍の広さの地所を買い、墓を斜めに設えなくてはならなかった。そうでもしなければ、狭いテラスを突きでてしまっただろう。急な坂を重たい荷を上げるというのは、けっこう骨の折れることだった。担ぎ手たちは大きな掛け声をあげながらでないと、やっていけなかった。やっと棺桶が墓の上に持ってこられ、祈りと歌を捧げられて、信仰の闘士は安らかに土中に下ろされ、野にとどめられたのである」。（EJ, S. 21 f.）

埋葬の仕方については特に詳細に記している。ときにユーモラスな表現も交えている。この異国で死んでいった宣教師に、アフリカで布教を続けた父の姿を重ねていたのかもしれない。

春から夏にかけては、南国高知の独特の風土に適応するに、苦労もあれば、それなりの喜びもあったようである。蚊や蛙、ムカデについての記述もある。ドイツとは異なる風土を感じるところである。妻はこの風土の違いに持病のリューマチを悪化させたが、ボーナーと息子はむしろそれを楽しんでいるようだ。この楽天性と適応力が彼の文章の明るさともなっている。

「4月の終わりには私たちの住む地方では田植えが、他の所よりも随

分早く始まる。この暖かな土地では同じ田で二度収穫できるのである。草原の風景になじんでいる私たちドイツ人にとって、灰色のぬかるんだ田がどんどん新緑に変わっていくのは、とりわけ気持のいいものだ。もちろん、この時期には田んぼから夕方になると蚊が次々と発生する。一匹一匹はライン地方の『ががんぼ〔大蚊〕』よりたちが悪いというわけではないが、その数たるやものすごく、夕方座っているときには蚊取り線香を焚かないといけないし、夜寝るときには寝床の上にネット〔蚊帳〕をかけておかないわけにはいかなくなる。私たちはこうしたこの土地ならではの予防措置に慣れたばかりか、蛙のいつ果てるともない鳴き声にも慣れた。この有用な両生類は私たちの庭にはあらゆる大きさのがいて、息子を楽しませている。息子は飽くことなきベーシストが自分の手の中でも再び大声で鳴きはじめると喜ぶのだった。

残念ながら、お付き合いしたくない輩もいる。5月3日、朝の4時45分に私は突然、妻と子供の恐ろしい声で目覚めた。妻が立ちあがり、子供の方を見、首に手をやるや、なにか堅いものに触れた。妻はそれを手につかもうとした。捕まえたものは、なめらかで堅い昆虫のような形の動物だった。それは彼女を一瞬にして三度噛み、痛々しい傷をつけてしまった。ふたつは頭に、ひとつは親指に。それでやっと払いのけることができた。私は跳んで行き、ベッドの下に入り込んでいた11センチの長さのムカデを、叩き殺した。私たちふたりとも見たこともない生き物だった。それはオオムカデで、日本でいう『ムカデ』だった。噛みつくと、顎から毒を出す。つかんではいけない。さっと叩いて払いのけるしかない。私がすぐに傷口をアンモニア水でこすった—私のできる最善のことだ—にも関わらず、妻の腕と首は硬くなった。妻はこの痛みに苦しみ、数時間部屋の中を行ったり来たりしていた。7時半に私たちは武田医院に行った。武田先生はドイツ語が流暢で私たちが懇意にしてもらっている当地で名望のある医師である。彼は私たちを落ち着かせたが、20センチの長さの『ムカデ』がいると話した。そいつに噛まれると噛まれた箇所が一時的に麻痺することすらあるという。オオムカデはしばしば庭の湿った暗い場所、たとえば豆のやぶに生息するという。この雨の夜、おそらくその一匹が外から窓のカーテンをつたって上がってきたところ、妻がなにげなく触ったばかりに落ちてきたのだろう」。(EJ, S. 22 f.)

蛙の鳴き声は、近くが田んぼだったため聞こえてきたのだろう。息子はけっこう楽しんでいる。蚊に対しては蚊帳を張って、蚊取り線香で「予

防措置」をしている。ヨーロッパではありえない数の多さに悩まされた。そして、妻がムカデに噛まれるという事件が起こる。この「見たことのない生き物」について、詳細に報告している。「武田先生」とは武田鹿雄のことで、高等学校の校医も務めたことがあった。彼はドイツ語が堪能だったので、ボーナー家のかかりつけ医となっていたのである。医院は中島町にあった。

土佐犬、尾長鳥など動物の記述もある。闘犬の仕方や尾長鳥の飼育方法など（EJ, S. 24 f.）、よく調べている。しかしなかでも比較文化的におもしろいのは猫の記述である。

「この鶏（尾長鳥）が見るからに豊穣に有しているものを、ここの大抵の猫はほんのわずかしか持っていない。猫は尻尾をちょんぎられているかのように見える。尻尾が生れつきないのだ。私たちの飼っている黒白の斑の雄猫もそうだ。にもかわらず、こいつは勇敢な動物で、非情にネズミをしとめる。この大きな齧歯動物は残念ながら日本ではたくさんいるが、マウスはめったに見かけない。尻尾のちびた雄猫はしかし、ネズミに対しては手加減しない—そいつを家から完全に駆逐する—が、人間、とりわけ子供の非道ぶりに対しては、まさしくアジア的な忍耐を示すのだった」。（EJ, S. 26）

欧米の猫はみごとに長い尻尾をしているのに、日本の猫の尻尾がほとんどないということは、よく知られている。ゴットロープもこれを面白がっている。宿舎で猫を飼っていたようで、観察も細かい。その「アジア的な忍耐」にも感服している。

ホタル狩りも情緒がある。息子が取ってきたホタルを寝床にかけてやったという。

「夕方、すこしばかり野外に出て行くと、ホタルを楽しむことができた。ホタルは五月の末になると大量に現れた。田んぼのあぜ道に、子どもや老人たちが箒と小さな針金でできた籠をもって出て行き、ホタルを捕まえようとする。家に帰ると皆、取ってきたものを見て喜んだ。息子は5月24日に初めて外に取りに行った。女中さんが案内し、他の子供たちが手伝ってくれていたが、息子はすぐに籠いっぱいにこの小動物を捕まえて帰ってきた。私たちは寝床の上に彼のためにそれを掛けてやり、寝入るまで楽しめるようにしてやった」。（EJ, S. 26）

ここでも、幼い息子が土地の風土になじんでいることがわかる。子供

を見守るボーナーのまなざしも大らかである。当時 40 歳に近かったボーナーにとって、この子がかわいくて仕方なかったことがわかる。また家には女中を雇っていた。

その後、夏季休業となり、ボーナー一家は避暑に出かけ、高知を離れるので、エッセイで再び高知に帰ってくるまでの時期の箇所は、ここでは省略する。

秋になると、室戸への遠出を敢行した。この時期はとりわけ気に入っていたようだ。

「嵐は秋の先触れである。ゆっくり、しかし確実に涼しくなっていった。もう蚊は数も攻撃意欲も減退していた。9 月 20 日に私は寝床のネット〔蚊帳〕を取ったが、妻と子供のためには用心して翌月までそのままにしておいた。10 月 12 日には夕方は私たちには寒く感じられるようになった。水銀は夜には 14 度まで下がったが、ドイツと較べればまだ十分に暖かった。青天が続いた。そこで私たちは少し遠出をしてみようと思った。日本で最も美しい半島とされる室戸へ行こうというのだ。土曜日の夕方に私たちは自動車会社にその旨言って、天気が崩れなければ、翌朝（10 月 16 日）8 時に迎えに来てくれるように頼んだ。小さな車が私たちを降車場にまで運び、そこでもう少し大きな車に乗り込んだ。富士に行ったときに乗ったような本格的な乗合自動車は四国にはまだなかったし、おしゃれな制服の車掌さんはもとよりいなかった。はいるだけのお客を普通の車の中に入れた。本来なら運転手と添乗員の他に四人しか乗れないことになっていた。しかしはね上げ式の座席の代わりにクッションの入ったベンチを入れ、二つのベンチで六人座れるようにした。西洋人の足の長さと尻回りでは窮屈だった。しかしでっぷり肥った土地の物見遊山のおじさんだってゆったり座られたのではやはりやっかいなことだろう。出発のとき乗客は七人だった（一人は添乗員の代わりに運転手の横に座った）、さらにハイナーちゃんがいる。彼は子供なのでただで乗せてもらえるが、その代わり座席は割り当てられない。途中で運転手はさらに三人の客を断り切れず乗せた。一人は自分のいる前に乗せたので、運転手自身が窮屈なこととなった。あとの二人は踏み板の上に立った。そこはすでに荷物が場を占めているところだった」。（EJ, S. 66 f.）

当時の市民たちがこうした行楽を楽しんでいたことがわかる。バスに

ついては、『土佐電鉄八十八年史』[26]によると、大正 6 年には高知自動車株式会社が高知―奈半利―甲浦間が開通した。この時期にたくさんの自動車会社が新路線を開発していた。ただこの当時には、バスとはいえ乗合自動車で、車掌もいなかった。定員は、ボーナーが記録しているように、あってなきがごとしのようだった。

昭和になると、室戸岬は「日本八景」に選ばれている。田山花袋が車でやってきて 1928 年に紀行文を書いている。[27]彼は室戸の整えられた交通の便に驚き、岬の上からの展望に圧倒され、まさに日本八景にふさわしいと絶賛した。たしかにこの時代の室戸にはバスもあり、高知から室戸へ通じる道はかなり整備されていたようである。今でこそ不便な地だが、意外に近代的な名所だったのである。同じ頃、山頭火が四国遍路に出ていたが、室戸には特別な思いが残ったようだ。「室戸岬はほんとうにいいところ」と手紙に書いている。奇しくもやはり同じ頃、ドイツ人一家もこの地に遊び、四国の印象を深くしていたのである。また一家の室戸遠出の日に、映画撮影の一行と偶然、同行することにもなった。

当時の自動車交通のあり方も知れて、興味深い。交通網も徐々に整備されていた。ボーナーは地方において自動車が道路の主になりかわろうとする時代に遭遇したといえるだろう。

「村々はほとんどすべてが街道沿いに延びていたが、これは今日の交通事情においてはメリットとはいえなかった。というのも、日本の家は、寒さの厳しいごく短い時期を除けば、開け放たれているからだ。どれほどたくさんの埃が床のマットや店先の商品の上に降り積もることか！埃に苦しめられるにも関わらず、人びとは至るところで道ばたに座り、そこで仕事をしていた。機を織ったり、紡いだり、繭を取ったり、魚を洗ったり、縫ったりしていた。鍵屋、指物師、板金工、彫り物師、散髪屋、みんな道沿いの仕事場を開けっぱなしにして作業をしている。多くの人は家の別の側で仕事をすることもできるのだろうが、せっかくのいろんなものを見せてくれる機会をあきらめるくらいなら、埃をのみこんでいる方がましということのようだ。鶏もよりによって道の上を行ったり来たりして、車をちっとも恐れない。ブーブー鳴らしても寄らないの

---

[26]八十八年史委員会『土佐電鉄八十八年史』、土佐電気鉄道株式会社、1991 年

[27] 田山花袋ほか『日本八景』、平凡社 2005 年。1927 年に大阪毎日新聞社と東京日日新聞社共同企画で、八大作家によって執筆された。

で、私たちの車はとうとうそれを轢いてしまった。運転手は車を停めて、持主に平身低頭謝っていた。

日本の車を運転するには超人的な忍耐を持たなくてはならない。牛とか馬が道を横切る、反対側には荷車が置いてあって、道をふさいでいる。車は停まり、持主が現れ動物を脇にどけたり、荷車を押していくまで待っている。トラックは慎重に、道沿いに流れる水路ぎりぎりで通り過ぎていく。道は狭いので、車が二台行き違うのがやっとだった。運転手たちは普通、道のど真ん中を走るが、後ろから車がきて、何度もクラクションを鳴らすときだけ、ゆっくりとよける。先に行かせるとき追い抜いていく運転手は丁重にこっちの運転手に頭を下げて、『アリガトウ』、すなわち Danke と言う。あるとき右側に、荷を積んでいるのに馬をつないでいない荷車が停まっていて、道いっぱいになっていて、車が通り抜けられなかった。だがふと見ると、別の側に二人の男が道ばたに田舎特有のやり方でしゃがんでいる。車がブーブーと鳴らし近づいていっても、彼らは立ちあがらずいっかな場所をあけようとしなかった。運転手は停まった。すると座っている男の一人が立ちあがった。しかしもう一人は肩越しにちらと後ろを振り返り、自分と荷車の間の距離を測り、おそらくはなんとかいけるという見解に達したに違いない。そのまま座っていた。運転手がその意図をくみとると、彼はその男と荷車の間を通り抜けようとし始めた。車の泥除けがしゃがんでいる男に触れたようだった。すると男は触れた体の部分を 5 センチほどやっと動かして、車が通れるようにしてくれた」。（EJ, S. 67 f.）

当時の沿道では車が通っても動物も人間もよけてはくれない。埃まみれになっても、人々は沿道に顔を出していたがった。このあたりの描写は細かく、ユーモアがある。室戸岬にいたるまでの風景も気に入り、絶賛している。この風景をそのままドイツに持って帰れたら、とも述べている。(EJ, S. 69)

秋についてはまた、かえでのことが取り上げられている。

「当地では多くの森の木が常緑の葉をつける。だが、この季節になると葉がしぼむ。それも日本のぎらぎら照りつける太陽のもとではドイツよりもっと紅葉する木も多い。それで至る所鮮やかな赤や黄色が美しい背景に映えるのである。この季節、最も日本人を楽しみませるのは、かえでである」。（EJ, S. 70）

秋には秋で、かえでを楽しむ。日本人の四季折々の楽しみ方を知るこ

ととなる。柿については、アジア原産ということで、この未知の果物について、ドイツと比較しながら紹介しているが、やや説明に苦労している。トマトやいちじく、リンゴと比較するという発想は日本人にはないだろう。

「晩秋の農園をいろどるのは、柿の木である。『カキ』はドイツ語では『ナツメヤシ風いちじく Dattelfeige』と呼ばれるが、見た目はトマトとよく似ていた。しかし革のような皮と堅い芯がある。高級なのには種がない。成長するとリンゴの木に似てくるが、今は葉を落とし、たくさんの輝く黄赤色の実を誇らしげに見せている。水気の多いおいしい実をつける。もちろん熟してだいぶたってからがおいしいのもある。乾かすために皮をむくと柿は乾燥いちじくのようになるが、日本では当のいちじくにはめったにお目にかかれず、あっても生のものしか手に入らない。

生のままでも長い間持つ柿は、ドイツにおけるリンゴと同じ役割を果たしている」。（EJ, S. 72 f.）

年末を迎えると、南国の冬の気候や風習を書きとめている。

「ドイツ語の『冬 Winter』という名は『風 Wind』からできている。日本語の『冬』も『Winter』の場合と同じく、『フユ』とは『吹く』ということなのである。当地では風がよく吹くことがこの第四番目の季節を特徴づける。たしかに台風（『大風』）と日本人がそう呼ぶすさまじい旋風は冬にはお目にかかることはない。それは『オオアメ』、すなわち『大雨』とともにやってくる。寒い時期は他のたいていの地方と同様、当地でも降雨は乏しい。しかしながら、乾いた風が冬にはよく一日中吹くし、荒れるとやっかいだ。『カゼヲヒキマシタ（彼は風を引きこんだ）』とは風邪のときよく使われる表現である。風通しのよい日本の家では少しばかり炭火を入れた鉢があるだけで、それは部屋を暖めるのではなく、手を暖めるものである。綿を詰めた服を着て、売り子たちは『火鉢』の前で足を組んでしゃがんでいる」。（EJ, S. 73）

Winter と「冬」という語との類似点を指摘し、「火鉢」の機能が西洋風の暖房とは違うとする説明には説得力がある。店先も西洋ではドアを閉めてウインドウショッピングができるようにしているのに、日本では冬でも開け放しであるとも言う。クリスマスも日本風に過ごす。樅の代わりに、松をクリスマス・ツリーにしたのである。

「天候は北緯 33 度のここでもクリスマスらしくなった。クリスマ

ス・ツリーとして、私たちは去年は地元産の樅の木を見つけていた。この年のクリスマスのためには私は朝、庭から若い松を取ってきた。日本で好まれるこの木はドイツ風のクリスマス飾りにすると華やかになった。そしてその下で私たちは、しばしば別れと帰郷のことに思いをはせることとなった」。（EJ, S. 74）

年末年始の高知での風習についての記述も興味深い。餅つきについては、

「この年の最後の両日には朝方、風呂の窓のところに雪の花ができていた。ハイナーちゃんは一日中、日本人の友達と道路わきの水路で氷を掬っていた。私たちが起きたときには、近所では（警官のところで）すでにヤカンが湯気を出し、新年の米が蒸されていた。そして最初の分がどんどんのされていく。祝日には特別な米『お餅』が出されたが、これはとてももちもちしていて、ちぎってねばっこい塊にされる。警官の家のところでは見たところ数家族が一緒に作業をしていた。家の一角には米蒸し器のついたオーブンがあった。粒が柔らかくなると、石臼に注ぎ入れる。二人の男が重たい木製ハンマーでそれを叩いた。その合間にもう一人がアツアツの塊をいつもすばやく素手でこね、そうしてまた冷水に手を浸す。ねばねばの米がよくのされると、かためて取り出され、それから米粉といっしょに平坦な木製の手桶に投げ入れ、ひっくり返す。それから一部を木の桟棚に上げて冷やし、また別のは女たちがすばやく大小の丸いお菓子にこねあげた。チョコレート色の甘い小豆の塊を詰めていて、味も少しチョコレートを思い出させた。男たちはお菓子作りを手伝うが、その様を写真に撮られるのを嫌がった。白い『モチ』の他に、黄色や褐色、緑色のも用意していた。黄色のにはきびが、褐色のにはトウモロコシが、緑のには海藻の粉がそれぞれ加えられた。（日本人はいろいろな海藻を食べる。）夕方になると、私たちは四つとも味見させてもらった」。（EJ, S. 74 f.）

餅つきの描写も正確である。また警官の家で近所の人々が集まって一緒に作業する様を生き生きと描いている。男も女も共に作業するのを好ましく眺めていることがわかる。こうした当時の日本における近所での分け隔てのない交流に、ボーナー一家も受け入れられていたことがうかがえよう。

正月に近くのカフェ（「オリエンタル・カフェ」）で食事をした。そ

の帰りに、初詣の人の群れに遭遇する。

「帰りに私たちは二人の身なりのよい、少々いい調子になっていた男たちが警官に出くわすのを目にした。その一人が法の番人たる警官に相撲を取ろうと言いだした。すると警官は受けて立ち、その太った男を三度高く持ち上げ、そうして彼を道からどかせて、しごくご満悦だった」。(EJ, S. 77)

こうした町の大らかな雰囲気を、ゴットロープの筆はよく書きとめている。やがて左翼弾圧、軍国主義が本格化することになるのだが、その前のきわめて平和で生き生きとした地方都市の空気が伝わってくる。

いよいよお別れを迎えることになる。帰路はシベリア鉄道を使うことにしている。荷物は帰国に間に合わせるために、すでに年末に送り出していた。冬の乾燥した空気のなか、山火事が頻繁に起こっていたことも記録している。

「夕方ころ風が収まると、私たちは盛大なお別れのための会食をこなさなくてはならなかった。それは高等学校の先生たちが私のために、私の妻もぜひにと言って、開いてくれたものである。『カフェ・ブラジーリエン』で開催された（日本語では『カフエ・ブラジル』）略して『ブラジル』という店は高知では西洋風料理店として一番大きかった。上階の大ホールには蹄の形をした花できらびやかに飾ったプレートが立てられていた。料理はアスパラやアイスクリームもあり、おいしかった（さらにお好みで酒でもビールでもフルーツソーダでも飲むことができた）。これは私たちへの感謝と称賛の言葉を表したものだった。私はそれに対してしかるべく応えなくてはならなかった。これは私たちが高知で開いてもらったお別れ会の最初で最後のものだったわけではない。どこでも人びとは私たちが間もなく故郷に帰るということを知っていた」。(EJ, S. 78 f.)

「カフェ・ブラジル」は前述した『高知市街図』にその写真が「カフェ・ブラジル支店」として出ている。電車通りの南、本町一丁目にあった。なお、ボーナー家がよく行った「カフェ・オリエンタル」は現在のグランド通り沿いの「オリエント・ホテル」あたりにあった。まさに高知における「カフェ」全盛時代だったのだ。高等学校関係者もよく利用していた。送別会は高等学校主催のは盛大に催され、妻も同伴した。その他にもなんども送別会があった。「ある大新聞」が取材に来たという

が、詳細は不明である。

3月7日、いよいよ出発である。

「そこには高等学校の校長や先生たちと生徒の大部分が集まっていたし、またヨーロッパ人やアメリカ人もいた。彼らとは長い間運命を共にしてきたのだった。握手し、三カ国語で感謝の言葉を言い合い、別れの挨拶をした。船の上ではたくさんの色とりどりの紙テープが、私たちに押しつけられた。最後の挨拶が下の埠頭に向けて、そして船の上に向けてなされた。それから私は高等学校バンザイと叫び、わが若き友たちに今一度、共に励んだこの地に捧げる彼らの歌を歌うようにお願いした。彼らは感激して心を一つにして歌ってくれた。船が動き始めた。色とりどりのテープが切れていくにつれ、心は痛んだ。私たちは今、おそらくは永遠にこの土地に別れを告げなくてはならないのだ。この数年の間たくさんの経験と仕事を積ませてくれたこの地に、この先も私たちは深い愛情を抱き続けることだろう」。（EJ, S. 79）

港でのお別れのシーンである。高等学校が全校挙げて見送りに来ている。紙テープを投げ合い、校歌を歌ってもらっている。船上の人となったボーナーはこの地に対して、この先も「深い愛情を抱き続けることだろう」と感慨に浸っていた。

おわりに

以上、ゴットロープ・ボーナーの二冊のエッセイを通して、大正から昭和にかけての四国についてみてきた。ことに『日本の一年』は、高知での生活を後一年残すだけとなったところから日記形式で書いた好エッセイである。四季の移り変わりをとらえ、当時の高知の様子も細かく描いている。本論では、こうした本に旧制高知高等学校のことや当時の高知の町の様子、庶民たちの行楽や生活の仕方、風習・風俗が、「外からのまなざし」で記録されていることを明らかにした。

二冊のエッセイを比較してみると、『日本の一年』は前作『東アジアへ』と対になっていることがわかる。たとえば、前者ではすぐ散ってしまう桜にがっかりしたとしていたのが、後者では桜の文化的意味に言及し、城山公園の桜を愛でている。高知に赴任したときお迎えがなかったが、後者では日本を去るときには、関係者もみな集まってお別れ会が、それも何度も行われたということになっている。港での別れのシーンも、『東アジアへ』の最後で義妹たちを見送っていたとき、高等学校生徒た

ちが校歌を歌い、紙テープを投げていたのが、今度は自分たちに対して同じことがなされている。土佐のイメージも堅いものから人情深いものになっている。巡礼者に冷たいという見方は、実際に住んでみるとよそ者に決して冷たくはない。息子のハインリッヒにも日本人の友達がいる。四国の自然にも愛着を持つようになる。息子は蛙の鳴き声を喜び、ゴットロープ自身も一家そろっての遠出を心より楽しむようになっていた。

とにかく彼が日本での生活を家族ともども楽しみ、周囲の日本人の中に溶け込んだ生活を送っていたことが、よくわかる。住むうちに高知への愛着が強まっていったことが読みとれる。第一次世界大戦後のインフレに苦しむドイツを逃れ異国にやってきた彼らは、日本の生活を家族ともども楽しみ、さぞかし四国の人と風土に心癒されたことだろう。そうした彼が書き残したエッセイはまた、当時の「古き良き」四国の様子を知るうえで、きわめて興味深い資料ともなっているのである。

ちなみに、息子ハインリッヒが高知を再訪している。そのときの新聞がゴットロープのことを紹介し、ハインリッヒや教え子たちの証言も載せている。当時のことを知るてがかりになるだろう。

『高知新聞』1983 年 4 月 27 日の記事「ボーナー氏（旧告高知高ボ博士の子息）55 年ぶり来高」には、「父から聴き、高知のことはずっと忘れなかった」として 4 月 25 日に来高したハインリッヒのことが紹介されている。彼は三歳から五歳まで高知で過ごした。ドイツ帰国後、ケルン市で銀行や教会に勤め、今は年金生活をする 60 歳である。結婚 33 年を記念して日本旅行をしたという。

国道 33 号を国鉄バスで高知入りした思い出を語り、「木の家ばかりで田畑が多かったのに、ホテルなどのビルがどんどん立っている、戦災で焼けた後、復興したとは聞いていたが、こんなに近代的な街になっているとは思わなかった」と高知の印象を述べている。4 月 26 日高知大学でドイツ語の授業見学、人文学部外国人教師ビヒマンと瀬戸助教授の初級ドイツ語授業だ。夫妻は市内ホテルでの旧制高知高同窓会と高知日独協会のレセプションへ。エミー夫人はケルン市幼稚園に勤務しているので、高知大学附属幼稚園見学し、ケルンのおとぎ話をきかせる予定。4 月 28 日に離高する、とある。

また、その前に『高知新聞』昭和 58 年 4 月 18 日の記事「ボーナーさん（旧高知高ドイツ人教官の長男）近く来高」には、55 年ぶりに高知

を訪れるハインリッヒのために盛大な歓迎準備の模様が紹介されている。そこにはまた、旧制高等学校のゴットロープの教え子たちのインタヴューも載っている。滝本実春（土佐育英協会理事、2回文甲）、西内巌（医師、4回理乙）、玉林憲義（兵庫医大名誉教授、2回文乙）、伊勢村寿三（大阪大学名誉教授、2回理乙）ら諸氏による回想である。それによると、ゴットロープは「授業中ドイツ語歌曲をよくハーモニカで吹いてくれた」、「かんでふくめるように教えてくれた」（滝本）という。ハインリッヒについては「金髪で青い目のかわいい少年で、よく校庭で遊んでいた」（目代真一、3回文甲）、「自分のドイツ語が通用するかどうか試すのにいい相手だった。石を持って“バス・イスト・ダス（これ何？）”に答えてくれた時はうれしかった」（蓼原康彦、元高知大教授4回理甲）という。ボーナーは学校では歌を好み、丁寧な教え方で親しまれていたようだ。[28]

四国の町にいた、いまや忘れられつつあるドイツ人家族が体験した異国での暮らしの記録は、このように当時の日本の地方都市の雰囲気を知る貴重な資料となっている。ドイツ語でドイツ人向けに日本について書かれたものが、今こうして日本で読まれることで、また違った価値を帯びてくるということの好例といえるだろう。こうした比較文化的視点を持った文献研究は、地域を見るひとつの方法としても有効なのではないだろうか。

---

[28]同じく『高知新聞』昭和58年4月25日「社会部　ホットライン」欄でも「国際交流」と題して、ボーナー夫妻来高のことが取り上げられている（「国と国との交流はもちろん大事だが、こうした市民レベルの交歓こそ、真の国際理解につながると思う」）。